HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	漢籍との比較から見た「鹿鳴」の歌 ： その巻頭性と表現性を中心に
Author(s)	馬, 駿
Citation	国語国文研究, 105, 24-37
Issue Date	1997-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94773
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_105_24-37.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

漢籍との比較から見た「鹿鳴」の歌
――その巻頭性と表現性を中心に――

馬　駿

一　方法と目的

古代の人々は今日よりも、環境に生き、生類を思いやり、我が身を顧み、自然と呼吸を同じくし、環境と運命を共にする。今日、これをわれわれに教えてくれる一例が万葉集の「鹿鳴」の歌である。記紀・風土記には鹿にまつわる話が多数見え、万葉集では多くの歌人が「鹿鳴」の歌を残している。このことは古来、鹿が人々の生活に密着した存在であったことの反映である。

そうした古代人の琴線に触れるような「鹿鳴」の歌が漢土の「鹿鳴」の詩と如何なる関わり方をしているかに、わたくしは関心を持つ。この観点から、「鹿鳴」の歌の巻頭性や表現の独自性の問題に取り組んでみたい。

二　「鹿鳴」の詩

万葉集における「鹿鳴」の歌を考える前に、漢土の「鹿鳴」の詩の生成と発展の相貌を概観する必要がある。

漢土の「鹿鳴」に関する記載は詩歌や散文や史籍などに散見するが、『毛詩』・「小雅」の一篇である「鹿鳴」はその先蹤として名が高い。一首は次の如くである。

◇（第一章）呦呦鹿鳴　食野之苹　我有嘉賓　鼓瑟吹笙
　吹笙鼓簧　承筐是将　人之好我　示我周行
（第二章）呦呦鹿鳴　食野之蒿　我有嘉賓　徳音孔昭
　視民不恌　君子是則是傚　我有旨酒　嘉賓式燕以敖
（第三章）呦呦鹿鳴　食野之芩　我有嘉賓　鼓瑟吹琴
　鼓瑟吹琴　和楽且湛　我有旨酒　以燕楽嘉賓之心

（原文の引用は『十三經注疏2　詩經』・

三一五頁・藝文印書館に拠る）

この「鹿鳴」の詩は饗宴の楽に当たる「小雅」の冒頭に収められており、三章からなる。第一章は宴会進行の賑わいの雰囲気を際立たせる描写によって臣下を礼遇する主君を讃美する。第二章は賓客の令徳への主君（この場合は周王のことと思われる）の称賛を主眼にする。第三章は主君が儀礼を以て群臣を遇することを繰り返し強調する形となる。詩はまさに、その小序に

○　鹿鳴、燕羣臣嘉賓也、既飲食之、又實幣帛筐篚以将其厚意、然後忠臣嘉賓得盡其心矣。

とある如く（引用は右に同じ）、主君の「厚意」と臣下の「盡其心」とで醸し出される和やかな雰囲気が宴席に弥漫し、君臣和睦の主旨の高揚に終始する一首である。この主旨は次の用例からも伺い知ることができる。

◇　鹿鳴之詩必言宴楽者、以人神之心洽、然後天気和也。

（『後漢書』・巻四十一・第五・鐘離列傳第三十。引用は中華書局本に拠る。以下の史書も全部これに同じ。）

ここの「鹿鳴」は、唐人李賢の注には「鹿鳴、詩小雅、宴羣臣也。其詩曰『呦呦鹿鳴、食野之芩、我有嘉賓、鼓瑟吹笙。』と見える如く、「小雅」と趣を同じくするものである。さらに、類書を見ても

◇　毛詩曰鹿鳴燕羣臣嘉賓也（『藝文類聚』・巻三十九・引用は中華書局・一九五九年九月・「紹興」本に拠る）

◇　鹿鳴燕羣臣也……（『北堂書鈔』・巻八十二・「饗燕篇六」・三六三頁。引用は文海出版社・中華民國五十一年十一月「明鈔」本に拠る）

とある如く、「鹿鳴」は「群臣」を宴する詩と目されるのである。

さて、当面の「呦呦鹿鳴」は表現上、どのような機能を果たしているのだろうか。『毛傳』は、

○　鹿得萍、呦呦然鳴而相呼、懇誠發乎中、以興嘉樂賓客當有懇誠相招呼以成礼。

と解釈する。即ち、鹿がよい餌を見つけると、仲間を呼び集めて共に食べるというように、主君は真心を込めて宴を張り、賓客を遇するの意だという。鳴く鹿の譲り合いから君臣の礼遇への連想が働くところに、典型的な「興」の表現手法があると見て取れる。と同時に、この場合の表現手法としての「興」自体が鳴く鹿の「相呼」を以て君臣の「懇誠」になぞらえる「比」にも当たることは言うには及ばない。さらに、詩の各章の冒頭では「呦呦鹿鳴」と繰り返される反復という詠法もここの「比」と「興」の修辞法と響き合って、鹿鳴の連想による君臣和睦というテーマを最大限に表面に押し出している表現効果を成すようになる。そのため、方玉潤は『詩経原始』（引用は藝文印書館・七一六頁・中華民國七十年二月に拠る）で、

○　至其音節、一片和平、尽善尽美、與「関雎」同列詩之始、殆度無貽議云。

と絶賛する。

かくして、濃厚な政治的色彩と生き生きとした文芸表現は詩としての「鹿鳴」の成功した秘訣であって、国風の「関雎」、大雅の「文王」、頌の「清廟」と共に異議なく「小雅」冒頭に飾るべき資格を持ち得たのである。その冒頭性は、例えば、

◇　四始之訣、五際之戹、其咎由此。　（『後漢書』・巻三十下）

の「四始」について、李賢が

◇ 四始謂關雎為國風之始、鹿鳴為小雅之始、文王為大雅之始、清廟為頌之始。

と述べていることによっても立証される。

ところで、「鹿鳴」は後世に大きな影響を及ぼし、長い歴史の中で歌い継がれてきている。ここでは、もう少し具体的に、用例を通して、「小雅」の「鹿鳴」の詩が如何に後世の人々に受け止められ、詠み継がれていたのかを見てみたい。

◇ 光武皇帝……升歌鹿鳴、下管新宮。〔李賢注：鹿鳴、詩小雅篇名也。新宮、小雅逸篇也。小、登也。登堂而歌、所以重人聲也。燕禮曰：「升歌鹿鳴、下管新宮。」〕

（『後漢書』・巻二・顯宗孝明帝紀第二）

◇ 禮畢、召校官弟子作雅樂、奏鹿鳴、帝自御塤篪和之、以娛嘉賓。〔李賢注：校、学也。鹿鳴、詩小雅篇名、宴羣臣嘉賓之詩。〕

（右に同じ）

これは朝廷の饗宴で「鹿鳴」に曲をつけて演奏された記録である。例で分かるように、「鹿鳴」は「君」（統治者側）にとって為政の標榜であると同時に、拘束と啓示の力を持つものと思われる。具体的な「鹿鳴」の内容は、

◇ 皇明馭歷、仁深海縣。載擇良辰、式陳高宴。喁喁卿士、昂昂侯甸。車旗煜燿、衣纓葱蒨。樂正展懸、司宮飾殿。三揖稱禮、九賓為傳。圓鼎臨碑、方壺在面。鹿鳴成曲、嘉魚入薦。筐篚相輝、獻酬交偏。飲和飽德、恩風長扇。

（『隋書』・巻十五・志第十・音樂下・「宴羣臣登歌辭」）

の例で一見して明白なように、『鹿鳴』の王の讃美という伝統を厳格に継承しているのである。また、『文選』巻二十七には魏武帝の「短歌行」一首が見える。

◇ 呦呦鹿鳴　食野之苹　我有嘉賓　鼓瑟吹笙

この四句は李善の注にある如く、「小雅」の「鹿鳴」の句をそのまま引用したもの。ただ、「小雅」の場合は賓客を宴する意であるのに対して、ここでは、政治的野望を抱く詩人曹操がわが酒宴を美化し、賢明な士に優越した待遇を保証するような目論見を表わすのに転用したものと思われている。

このように、「鹿鳴」の詩が臣下に対する主君の政治的姿勢の標榜だと言うならば、次の例の場合は主君への臣下の期待だと見なすことができる。

◇ 遠慕鹿鳴君臣之宴、中詠棠棣匪他之誡。

（『三國志』・「魏書」・巻十九・陳思王植傳）

◇ 式宴不違禮、君臣歌鹿鳴。

（『宋書』・巻二十二・志第十二　樂四・「当漢吉昌」）

「鹿鳴」に強調されるような君臣和楽は「君」のみならず、「臣」にとっても目指す目標である。「臣」は常に臣下礼遇の周王の再来を、当代の君主に期待する。「鹿鳴」を高らかに歌うこと自体は為政の寛容を意味する反面、現実の暗黒を象徴する場合もある。従って、「鹿鳴」は「臣」の立場では当代の「君」を讃美したり、批判したりする試金石なのである。

右の如く、「鹿鳴」の詩は主に縦関係、つまり、上下関係が詠まれ、そこには「君」と「臣」の理想が託されるのである。一方、「鹿鳴」の詩はまた、次のようにも理解されている。

◇ 駿従弟安祖、少而聡慧。年八九歳、就師講詩、至鹿鳴篇、語諸兄云「鹿雖禽獣、得食相呼、而況人也？」自此之後、未曾獨食。

（『魏書』・巻四十五・列傳第三十三・辛紹先）

ここでは、「君」と「臣」は「鹿鳴」の詩で為政の基準を求めるのに対して、一般の人は「鹿鳴」の中に譲り合いという素朴な理を見つけ出し、そこには兄弟・朋友という横の対人関係の理想が託されるのである。よって、

◇ 關雎興於鳥、而君子美之、為其雌雄之不乖居也、鹿鳴興於獣、君子大之、取其見食而相呼也。

（『淮南子』・「泰族訓」。引用は「四部備要」本に拠る。）

に見える如く、「鹿鳴」は君子に愛唱される。また、「鹿鳴」は

◇ 鸞回翔索其羣兮、鹿哀鳴而求其友。〔李賢注：此言所居之處、山林飛走之状也。索、求也。詩曰「求其友聲」也。〕

（『後漢書』・巻二十八・馮衍傳第十八下）

のように、すでに理想的な君臣関係を求めるというモチーフから親密な朋友関係を求めるといった用法が派生してくるのである。この派生的用法は特に親友との別離の際に著しい。例えば、『文選』巻二十九には、蘇武が親友李陵に贈った詩

◇ 骨肉緣枝葉　結交亦相因　四海皆兄弟　誰為行路人
況我連枝樹　與子同一身　昔為鴛與鴦　今為参與辰
昔者長相近　邈若胡與秦　惟念当乖離　恩情日以新
鹿鳴思野草　可以喩嘉賓　我有一樽酒　欲以贈遠人
願子留斟酌　叙此平生親

の一首「別詩」がある。この詩に関しては、蘇武の実作かどうかの問題が古来問われてきている。それはともかくして、この詩はまず、木と葉で兄弟の間の親密さを喩え、『論語』の「四海之内皆為兄弟」（「顔淵第十二」・『十三経注疏8　論語孝経爾雅孟子』・一〇六頁・藝文印書館）を典拠として引く。続いて、往時の親しみを鴛鴦で、今日の別れを参星と辰星で具象化する。さらに、「長相思」と「胡與秦」との対比を比喩的に捉え、長い別れの辛さを浮き彫りにする。そして、『詩経・小雅』の「鹿鳴」の引用で惜別という主題を深めるという閉じめとなる。

ここの「鹿鳴」は勿論、李善の注を待つまでもなく、明らかに「小雅」の「鹿鳴」を下敷きにするものである。ここでは、見逃してはならぬ点が二つある。詩の誦詠の場と「鹿鳴」の表現機能がそれである。先に見てきたように、前出の「鹿鳴」は群臣嘉宴を会する宴席で詠まれるのがほとんどで、その宴会も和やかな雰囲気を漂わせるものであるから、「歓宴」と言うべきだろう。対して、蘇武のこの詩は、宴会という場を共有する点において従来の「鹿鳴」の詩と一致するものの、終始、別離の耐え難い空気に包まれるので、「別宴」とも言うべきものにふさわしい。これは「鹿鳴」に関する新しい理解であり、また、新しい表現でもあると言えよう。

とすれば、「鹿鳴」は表現上、別れの宴席においてどのようにして、機能を果たしたのだろうか。それはなによりも惜別というテーマの深化にある。即ち、ここは、今日を限りに、平素の親しみを胸に暖

め、目前の宴会は「別宴」と言いながらも、君を少しでも長く引き留めたい、という朋友関係を示す「鹿鳴」であって、「小雅」以来の上下関係を強調する「鹿鳴」ではない。

右のように、漢文学において「歓宴」と「別宴」で「鹿鳴」を詠む方法は『懐風藻』の詩人たちにも踏襲される。例えば、前者の例を見れば、

◇　五言。秋日於長王宅宴新羅客。一首　賦得風字

嘉賓韻小雅。設席嘉大同。鑒流開筆海。攀桂登談叢。
盃酒皆有月。歌聲共逐風。何事専對士。幸用李陵弓。

（背奈行文・引用は古典大系本に拠る）

と挙げられる。これは長屋王の邸宅で新羅の客を宴する時に詠まれた詩。詩の「嘉賓韻小雅」の句は小島憲之氏の指摘のある通り、「小雅」の「鹿鳴」を踏まえたもので、友好平和の雰囲気の中で嘉賓を喜び迎える意と思われる。後者の例には次の一首が見られる。

◇　五言。秋日於長王宅宴新羅客。一首　賦得稀字

玉燭調秋序。金風扇月幃。新知未幾日。送別何依依。
山際愁雲斷。人前楽緒稀。相顧鳴鹿爵。相送使人歸。

（右に同じ・刀利宣令）

一首は傍線部に明言される如く、先の天下太平の称賛の「鹿鳴」の詩とは異なる。ここには、宴席の賑わいと喜びがなく、別離の耐え難い雰囲気に包まれるばかりである。これは宴席で「鹿鳴」を別れの表現として詠むものであって、前出の蘇武の「鹿鳴」の用法と表現上、軌を一にするものである。

以上、漢土の「鹿鳴」の詩を概観してきたように、「鹿鳴」の詩は、本来君臣和楽という縦の関係を主旨とするもので、酒宴という誦詠の「場」を持つ。これは「小雅」の「鹿鳴」以来の世界であって、「鹿鳴」の詩の主流である。一方、時代の移り変わりに伴い、蘇武の作のように、横の関係を表わす「鹿鳴」の用法が出現することによって支流として「鹿鳴」の詩の世界を立体化させる次第となる。

三　「鹿鳴」の歌

万葉集における「鹿鳴」の歌は漢土の「鹿鳴」の詩と如何なる関わりを有するだろうか。また、「鹿鳴」の歌自体は表現上如何なる独自性を具するだろうか。この二つの問題の検討に入る前に、まず、集中の「鹿鳴」の歌の整理を行ないたい。

中西進氏は「鹿鳴の定位」（『万葉集の比較文学的研究』・九十～九十四頁・桜楓社・昭和三十八年一月）において、歌の中で「鹿」という語の有無を計算の基準にしており、「鹿鳴」の歌を四十六首得るが、わたくしは、「鹿」に関連する歌の中で相聞的要素が入っている歌を「鳴くシカ」の歌と見、それを「鹿鳴」の歌として扱いたい。逆に言えば、もっぱら狩猟生活を舞台にする「鳴かぬシシ（鹿・猪）」の歌を「鹿鳴」の歌から外すことにする。これにより、集中の「鹿鳴」の歌は中西進氏の挙げたうちの（後に地方の鳴かぬシシの歌として取り扱う）巻四の五〇二、巻八の一五七六、一六一三、巻九の一六七八、巻十の二二七七と巻十六の三八四の六首を除き、中西氏の挙げていない巻八の一五一一と巻九の一六六四の二首を加え、四十二首が得られる。その歌の番号を巻順に掲示すると、次の

ようになる。

巻一：八四＝一首
巻四：五七〇＝一首
巻六：九五三＝一首
巻八：一五一一、一五四一、一五四七、一五五〇、一五六一、一五八　〇、一五九八、一五九九、一六〇〇、一六〇二、一六〇三、一六　〇九、一六一一＝十三首
巻九：一六六四、一七六一、一七六二、一七九〇＝四首
巻十：二〇九四、二〇九八、二一四一～二一五六＝十八首
巻十二：三〇九九＝一首
巻二十：四二九七、四三一九、四三二〇＝三首

さて、万葉集における「鹿鳴」の歌についての比較研究は中西進氏（前掲論文）によって精細に展開されている。以下は必要な限りで触れることにしたい。まず、集中の次の三首に注目しよう（訓み下し文の引用は集成本に拠る）。

◇　泊瀬の朝倉の宮に天の下知らしめす大泊瀬稚武天皇の御製歌一首

夕されば　小倉の山に　臥す鹿し　今夜は鳴かず　寐ねにけらしも　（巻八・一五一一）

◇　岡本天皇の御製歌一首

夕されば　小倉の山に　鳴く鹿は　今夜は鳴かず　寐ねにけらしも　（巻九・一六六四）

◇　長皇子、志貴皇子と佐紀の宮にしてともに宴する歌

秋さらば　今も見るごと　妻恋ひに　鹿鳴かむ山ぞ　高野原の　上　（巻一・八四）

右の三首に関しては、雄略天皇の歌は巻九の巻頭、舒明天皇の歌は巻八の秋雑歌の冒頭、長皇子の歌は巻一のしめくくりをそれぞれ飾る。これは単なる偶然と言えば、妙に過ぎよう。そこで、中西進氏は、前掲論文で雄略天皇と舒明天皇の二首について、

○　当面の歌は巻九の巻頭、或いは又巻八の秋雑歌の冒頭におかれているのである。これも意識的な取扱いというべきであろう。（九十二頁）

と指摘した上で、編纂者の意図には「十分詩経の連想があった」（九十三頁）と説く。氏はまた、『万葉集』（講談社・昭和五十九年九月）の脚注で長皇子の一首について、

○　『詩経』の賓客を遇する詩『鹿鳴』を踏襲すると解する。

中西説は示唆に富むものである。ただし、事実として、氏の「鹿鳴」の歌に関する右の論は「鹿鳴」の詩との比較というより、両天皇の「鹿鳴」の歌が定着するまでの様相を究明するところに力点が置かれているようなので、問題が残る。例えば、巻頭・冒頭・巻尾（以下はこれを巻頭または巻頭性と一括して称する）に座る当面の三首は先に見てきた「小雅」の「鹿鳴」と比較すれば、一見内容的には相当な隔たりがあるという大事な問題がそれである。

具体的には、「小雅」の「鹿鳴」の詩と当面の三首の「鹿鳴」の歌を見れば、類似点として、両方とも巻頭に飾られていることと、両方とも詠作者としていずれも王或いは天皇・皇子であることが挙げられる。

一方、詩は「鹿鳴」による「比」と「興」の手法で君臣和楽を強調することによって王の讃美を主旨とする雑歌的な歌い柄であるのに対して、歌は妻恋の鹿への憐れみの情を漂わせる相聞的な要素の濃厚な詠みぶりをしている。これは特に、詩と歌の相違点として認めなければならないだろう。というのは、この点は「小雅」の「鹿鳴」の詩と当面の「鹿鳴」の歌との顕著な相違ばかりでなく、漢土の「鹿鳴」の詩と万葉集全体の「鹿鳴」の歌との絶大な区別でもあるからである。

この相違と区別に関して、歌の表現に即して言えば、確かに、詩の「鹿鳴」は「仲間」を呼び集める意味で、歌の「鹿鳴」は「妻」を呼び誘う意とでは「呼ぶ」という動作で共通項を持つものの、「呼ぶ」相手が詩では「仲間」、歌では「妻」である点で大きく異なる。万葉集の「鹿鳴」の歌は相聞的要素を色濃く帯びるものとして、雑歌的性格の「鹿鳴」の詩と大いに径庭してくるのである。

それでは、この相違をどう見るべきだろうか。冒頭性と、王または天皇・皇子の詠だという共通項を重視して、「小雅」の「鹿鳴」と当面の三首の接点をどこに求めたらよいのだろうか。冒頭性を持つ「鹿鳴」の詩と歌の比較研究と言えば、これは避けて通れぬ問題だろう。が、従来の研究はこの問題には言及されていない。

雄略天皇の「鹿鳴」の歌については、歌の伝承を中心にして積み重ねられてきた研究がある。例えば、前出中西進氏の論のほかに、小島憲之氏・「『トガ野』の鹿と『ヲグラ山』の鹿」（『万葉』・九号。『上代日本文学と中国文学中』所収）、伊藤博氏・「舒明朝以前の万葉歌の性格」（『萬葉集の構造と成立　上』）などが挙げられる。これらの研究はいずれも、『日本書記』仁徳紀・三十八年の条の「鹿」の話に注目する。

◇　秋七月に、天皇と皇后と、高臺に居しまして避暑りたまふ。時に毎夜、菟餓野より、鹿の鳴聞ゆること有り。其の聲、寥亮にして悲し。共に可怜とおもほす情を起したまふ。月盡に及りて、鹿の鳴聆えず。爰に天皇、皇后に語りて曰はく、「是夕に當りて、鹿鳴かず。其れ何に由りてならむ」とのたまふ。明日、猪名縣の佐伯部、苞苴獻れり。天皇、膳夫に令して問ひて曰はく、「其の苞苴は何物ぞ」とのたまふ。對へて言さく、「牡鹿なり」とまうす。問ひたまはく、「何處の鹿ぞ」とのたまふ。曰さく、「菟餓野のなり」とまうす。時に、天皇、以為さく、是の苞苴は、必ず其の鳴きし鹿ならむとおもほす。因りて皇后に語りて曰はく、「朕、比懐抱ひつつ有るに、鹿の聲を聞きて慰む。今佐伯部の鹿を獲れる日夜及び山野を推るに、即ち鳴きし鹿に當れり。其の人、朕が愛みすることを知らずして適逢に獵獲たりと雖も、猶已むこと得ずして恨しきこと有り。故、佐伯部をば皇居に近けむことを欲せじ」とのたまふ。

（訓み下し文は古典大系本に拠る）

傍線部に示す如く、鹿の鳴き声は仁徳天皇の目では「寥亮にして悲し」いがゆえに、「可怜とおもほす情を起」すもので、しかも、わが心を慰めてくれるものである。この鹿の話で看過してはならぬのはすでに先学の指摘のあったように、「仁徳天皇の慈愛を告げる」点であって、これは「聖帝仁徳天皇の面目を伝える一話」である（伊藤博氏・前掲書・一一五頁）。

小島憲之氏は仁徳紀の鹿の話と雄略帝の「鹿鳴」の歌との関係について、

○　この「語り」は（傳説）或「歌がたり」は口承のうちに主人公を換へ、莵餓野の鹿も大和の小倉山（小椋山）のそれに變換することは、口承文學の一般公式であった――固有名詞の變換は口承文學に於て特に著しい。その主人公は仁徳以後の記事をみればわかるごとく、最もふさはしい人は、仁徳天皇を除けばやはり雄略天皇に指を屈しなければなるまい。

と指摘する（前掲書・七二六頁）。

さらに、中西進氏は「この仁徳紀は、天皇のやさしい生類憐みの感情を表面に押し立てている。これは法苑珠林の慈悲や、宇治拾遺らの仁政太平のという説話型と同じ範疇に入るもの」と見る（前掲書・一〇二頁）。

諸家の論説はいずれも卓見として傾聴すべきだろう。となると、比較の立場に立ち戻ってみれば、「小雅」の「鹿鳴」の詩と雄略天皇・舒明天皇の「鹿鳴」の歌の間には、詩の王の礼遇の讃美と歌の天皇の仁政の謳歌で繋がっていることが浮かび上がってくるのである。この詩と歌を以て為政者を誉め称えるというモチーフが、接点なのではあるまいか。この接点があるからこそ、当面の三首は現在の位置に配置された次第ではあるまいか。

そもそも、編纂論的に見れば、当面の三首の配列は「巻頭と巻末とになるべく重い歌を配列しようとするのは、萬葉集が原則的に持つ構造観」に基づくもので、雄略天皇の歌は「近つ世」の歌として、舒明天皇の歌は白鳳の古歌として、それぞれその部立の始めに編まれることによって、あとの部立に対する古歌性を兼ねる（集成・伊藤博氏「萬葉集の生いたち（二）巻五～巻十の生いたち）。したがって、「鹿鳴」の歌を冒頭に据えることは「小雅」の「鹿鳴」と同じ価値を持ち、先代と当世の天皇の仁政の讃美を意味する。一方、伊藤博氏は、巻一をしめくくる長皇子の歌について、巻一の宮号の書式に着眼し、風変りな「寧楽宮」という標題下にあるこの歌を後人の追補だと指摘する（集成・伊藤博氏「萬葉集の生いたち（一）巻一～巻四の生いたち）。全くその通りだと思われるが、ここでは、なぜ、巻一の棹尾にこの「鹿鳴」の歌が補われたのか、という追補者の意図を考えると、一首は「鹿鳴」の宴に漂う皇子間の親睦をにおわすと同時に、天下の平和を謳歌することが天皇の為政の讃美にも繋がっていくことを物語ると見られるのではあるまいか。

次は、「鹿鳴」の歌の表現の独自性の問題に関して「妻恋」という素材に焦点を当てて考えてみたい。

先に見ていた通り、「鹿鳴」＝妻恋という発想は管見の限りでは漢土にないらしい。「鹿鳴」の詩の世界では、前出の『後漢書』の巻二十八の馮衍傳には「鹿哀鳴而求其友」とある如く、鹿の鳴くことに関して、求める対象は比喩的に友人を指して言う程度である。だとすると、「鹿鳴」＝妻恋という発想は、上代日本人が独自に持つに至ったもので、その生成は自然界への観察や農耕生活の体験によっておのずから導かれたものだと見て然るべきだろう。

かく見てくると、万葉集では、鹿だけではなく、

帥大伴卿、次田の温泉に宿り、鶴の声を聞きて作る歌一首

◇　湯の原に　鳴く葦鶴は　我がごとく　妹に恋ふれや　時わかず鳴く
（巻六・九六一）

巫部麻蘇娘子が雁の歌一首

◇　誰れ聞きつ　こゆ鳴き渡る　雁がねの　妻呼ぶ声の　羨しくもあるか
（巻八・一五六二）

◇　春されば　妻を求むと　うぐひすの　木末を伝ひ　鳴きつつもとな
（巻十・一八二六）

◇　ますらをの　出で立ち向ふ　故郷の　神なび山に　明けくれば　柘のさ枝に　夕されば　小松が末に　里人の　聞き恋ふるまで　山彦の　相響むまで　ほととぎす　妻恋すらし　さ夜中に鳴く
（巻十・夏雑歌・一九三七）

◇　港風　寒く吹くらし　奈呉の江に　妻呼び交し　鶴多に鳴く

右の四首は、天平二十年の春の正月の二十九日、大伴宿禰家持。
（巻十七・四〇一八）

などの用例に見える如く、鳥の鳴き声も妻を恋しく思う意だと捉えられている。このことから、動物を思いやってわが身を顧みるといった相聞的な詠み方は万葉歌では一般的であったと考えられる。したがって、「鹿鳴」の歌における妻恋という表現も無論この類の発想に属するものと捉えられるべきだろう。

以上、雄略天皇と舒明天皇と長皇子の歌がそれぞれ巻頭・冒頭としめくくりに据えられる点を漢籍との比較の視点から捉え、「鹿鳴」の歌の表現上の独自性が土着の発想によるものだと指摘してみた。言ってみれば、このように、「鹿鳴」の詩と歌をめぐって、その巻頭性を認めなければ、なぜ、問題の三首が今の位置に配列されたのかという秘密を解くことは難しいのではないか。また、逆に、「鹿鳴」の歌の表現における独自性を深く追求しなければ、「鹿鳴」の詩と歌の関連性を見失う恐れがあるのではないか、と考える。

四　「鹿鳴」の歌の地域性

万葉集の「鹿鳴」の歌に関して、表現素材と詠法では都会と地方の違いが歴然としている。以下はこの点について考察を加えてみたい。

集中の「鹿鳴」の歌で題詞や左注によって作者の判明できるものが十五人いるけれども、仮に、それを、身分別にすると、次のようになる。

Ⅰ天皇：舒明天皇（巻八・一五一一）、雄略天皇（巻九・一六六四）

Ⅱ皇子：長皇子（巻一・八四）

Ⅲ王　：湯原王（巻八・一五五〇）、笠縫女王（巻八・一六一一）

Ⅳ官人：麻田陽春（巻四・五七〇）、金村歌集或車持千年（巻六・九五三）、大伴旅人（巻八・一五四一）、藤原八束（巻八・一五四七）、文馬養（巻八・一五八〇）、大伴家持（巻八・一五九八、一五九九、一六〇二、一六〇三、巻二十・四二九七、四三一九、四三二〇）石川広成（巻八・一六〇〇）、「云柿本人麻呂作」（巻九・一七六一）

Ⅴ他　：大伴坂上郎女（巻八・一五六一）、丹比真人（巻八・一六〇九）

右に挙げるⅠ～Ⅴの作者名を見れば、これらの作者は地位の差こ

そあれ、ひとまず、所謂上流社会或いは官僚社会とも言う階層に属するものだと言える。したがって、「鹿鳴」の歌は極めて都会的な色彩が濃厚だと予想される。それならば、この都会性はどのようにして、歌の内容と表現の素材に投影されたのだろうか。ここでは、万葉の代表的歌人である大伴家持の「鹿鳴」の歌を見てみよう。

◇ さを鹿の　朝立つ野辺の　秋萩に　玉と見るまで　置ける白露
◇ さを鹿の　胸別けにかも　秋萩の　散り過ぎにける　盛りかも去ぬる　（巻八・一五九八、一五九九）
◇ 山彦の　相響むまで　妻恋ひに　鹿鳴く山辺に　ひとりのみして
◇ このころの　朝明に聞けば　あしひきの　山呼び響め　さを鹿鳴くも　（巻八・一六〇二、一六〇三）
◇ をみなへし　秋萩しのぎ　さを鹿の　露別け鳴かむ　高円の野ぞ　（巻二十・四二九七）
◇ 高円の　秋野の上の　朝霧に　妻呼ぶを鹿　出で立つらむか
◇ ますらをの　呼び立てしかば　さを鹿の　胸別け行かむ　秋野萩原　（巻二十・四三一九、四三二〇）

右は集中の大伴家持の「鹿鳴」の歌の用例である。それを表現素材の視点から語単位で抽出して示すと、次の如くである。

◇ ①鹿・さを鹿に関するもの：「鹿」二例、「さを鹿」五例。②鹿・さを鹿の行動に関するもの：「立つ」二例、「胸別け」二例、「露別け」一例、「相響む」一例、「呼響む」一例、「鳴く」二例、「恋」一例、「呼ぶ」二例、「行く」一例、「しのぎ」一例。③鹿・さを鹿の行動の向けられる対象に関するもの：「妻」二例、「萩」四例。鹿・さを鹿の時期・時間に関するもの：「秋」四例、「朝」三例、「露」二例。④鹿・さを鹿の行動の場所に関するもの：「野」四例、「山」三例、「原」一例。

右のように並べてみると、大伴家持の「鹿鳴」の歌は相当固定化した形を持っているように見受けられる。即ち、大伴家持は「鹿鳴」の歌では秋の野或いは山の鹿を景物として捉える。そして、景物としての鹿は早朝妻を求めるために鳴き立てるように描写する。これは当時の妻問い婚という風習に根差した歌の表現である（拙稿「『鹿』の訓の再検討――万葉歌をめぐって――」・『日本学論叢Ⅱ』所収、外語教学与研究出版社、一九九一年十二月）。実際、大伴家持のここの歌だけではなく、万葉集全体の「鹿鳴」の歌は表現上、このような類型化する傾向を有すると認められる。次の歌はその同想の例の一部に過ぎない。

◇ 我が岡に　さを鹿来鳴く　初萩の　花妻どひに　来鳴くさを鹿　（巻八・一五四一・大伴旅人）
◇ 秋萩の　散りの乱ひに　呼びたてて　鳴くなる鹿の　声の遙けさ　（巻八・一五五〇・湯原王）
◇ 吉隠の　猪養の山に　伏す鹿の　妻呼ぶ声を　聞くが羨しさ　（巻八・一五六一・大伴坂上郎女）

相聞的、風雅な都市の「鹿鳴」の歌に対して、東歌と地方の歌の鳴かぬシシの歌は次のように詠まれる。

◇ 安達太良の　嶺に伏す鹿猪の　ありつつも　我れは至らむ　寝所な去りそね　（巻十四・三四二八）

◇　さを鹿の　伏すや草むら　見えずとも　子ろがかな門よ　行かくしえしも　（巻十四・三五三〇）

◇　妹をこそ　相見に来しか　眉引きの　横山辺ろの　鹿猪なす思へる　（巻十四・三五三一）

この三首は東歌に見えるシシ（鹿・猪）に関するすべての用例である。三例の傍線部の表現と発想はいずれも狩猟の生活で鹿又は猪への観察を通して得たもので、しかも、比喩的な使い方をしている。ここでは、シシは何も風雅とか情緒的な衣を被せることがないけれども、それだけに野趣に富む素材として歌に詠み込まれている。同様に、他の地方のシシの歌も東歌のそれに等しい様相を見せている。

◇　紀伊の国の　昔弓雄（さつを）の　鳴り矢もち　鹿とりなべし　坂の上にぞある　（巻九・一六七八）

これは歌の題詞に示す如く、「大宝元年辛丑の冬の十月に、太上天皇・大行天皇、紀伊の国に幸す時の歌十三首」の中の一首である。紀伊の国のこの歌も風雅な「鹿鳴」の歌ではなく、古来の名高い猟師にまつわる伝説を内容とした狩猟の歌である。さらに、巻十六の越中国の歌にしても、

◇　弥彦　神の麓に　今日らもか　鹿の伏すらむ　裘（かはごろも）着て　角つきながら　（巻十六・三八八四）

のように、鳴く鹿とは無縁で、鹿舞に関係があろうと思われる。

右のように、地方の鳴かぬシシの歌と都会の「鹿鳴」の歌との比較をすることによって、「鳴かぬシシの歌」は狩猟生活を舞台とするものであるのに対して、「鹿鳴」の歌は鹿の鳴き声による妻恋だという内容であることが明らかになった。これは都市の「鳴く鹿」と地方の「鳴かぬシシ」の違いでもある。

五　麻田陽春の一首

最後に、麻田陽春の「鹿鳴」の歌に触れてみたい。一首は巻四に収められており、次がそれである。

◇　大宰帥大伴卿、大納言に任けらえて京に入る時に臨み、府の官人ら、卿を筑前の国蘆城の駅家に餞する歌四首

大和へに君が発つ日の　近づけば　野に立つ鹿も　響めてぞ鳴く　（五七〇）

右の二首は大典麻田連陽春。

題詞に示されている如く、大伴旅人が大納言に任命されて、入京する際、筑前国の蘆城の駅家で大宰府の官人たちによる送別の宴会が開かれた。歌はその場での詠。時は天平二年十二月。鹿が鳴くのは秋であって、冬の十二月ではありえない。これは古今東西を問わぬ常識である。それで、この歌の鹿の鳴くべき時でない点については、早くも契沖『代匠記』（精撰本）によって、

○　今按、大伴卿ハ天平二年十一月ニ大納言ニ任セラシテ、十二月ニ都ヘ上ラレタレハ、実ニハ鹿ノ鳴時ニ非スと提起されている。近時、集成も

○　鹿が妻を恋うて鳴くのは十二月ではなく、秋が普通である。と注意する。それなのに、作者麻田陽春は常識に反して、なぜ「野に立つ鹿も　響めてぞ鳴く」と詠み、またそう詠まなければならなかったのだろうか。これは作者の表現意図に関わる問題である。

この歌の「鹿鳴」という表現をめぐって従来の解釈はおおまかに二つに分かれている。一つは鹿鳴を実際の映像として捉える説で、ここでは実景説とする。対して、管見のかぎりでは鹿鳴を「小雅」の「鹿鳴」に出典を求める指摘（全注所引宗政説）で、ここでは典拠説と仮称しておく。まず、実景説を見ることにしたい。

当該歌の鹿鳴という表現に関して、『代匠記』（精撰本）が持つ影響力は大きい。契沖は次のように説いている。

○　陽春ハ大典ニテ師ノ属官ナレハ、第二第三ニ、鹿ジ物イハヒフセリテトヨメル如ク〈帥ヲハ〉敬フヘキ人ナル故ニ我身ヲ鹿ニナシテ別ヲ慕ヒテ泣ヲヨメルナラン。

この契沖説は主として二点を含む。一つは鹿鳴を実景と見て、それを作者の惜別の心情の押し出しに用いるとする点で、いま一つは鹿鳴の表現を送る側と送られる側の身分に推し量って解釈する点である。以来、ほとんどの注釈書は契沖説に従う。例えば、古義、總評、評釋、窪田評釋、全註釋、私注、注釋、大糸、集成、釋注がそれで、通説となっている。

なるほど、ここでは、鹿の鳴く時期と、酒宴、しかも餞別の酒宴といった歌の具体的な場の問題を措いて言うならば、「鹿鳴」を実景とする従来の説はうなずけるものだと言える。ただし、逆に言えば、鹿鳴の時期と歌の場の問題こそこの歌の深層に揺曳する作者麻田陽春の表現意図に迫り得る唯一のカギとも言うべきものであって、無視するわけにはいくまい。

それで、通説に対して、最近、漢籍の立場から問題の解決を図る典拠説が出されている。典拠説を提唱したのは宗政五十緒氏である。氏の説は木下正俊氏担当の『全注・巻四』を通して紹介されている。

○　なお、この旧暦十一月の前後という冬の時期に鹿が鳴くということに従来疑問が持たれていなかったが、宗政五十緒氏は短歌誌あけぼのの月例会（昭和五十一年）において次のような新見を発表された。同氏の好意によって提供されたその要旨を示せば次の如くである。

これはおそらく詩経小雅の「鹿鳴」によったものであろう。詩経小序によれば、小雅はこれを以て群臣嘉賓を燕（宴）する詩としている。宴会の歌であれば、鹿が鳴かなくても、それにかけて詠んだ歌と考えることができる。

木下正俊氏はこの新見について、次のように評価する。

○　氏以前に、鹿の鳴くべき時でないことを指摘した者は代匠記精撰本であるが、陽春は大典で帥の属官であるからわが身を鹿になして別れを慕って泣くを詠んだのであろう、と言うにとどまった。

典拠説は、当該歌の酒宴における鹿鳴と、群臣嘉賓を宴する「小雅」の「鹿鳴」との間に共通した歌の場があることを指摘することによって、鹿の鳴く時期に関する契沖以来の疑問を解消するのに妥当だとするから、高く評価されるべきだと思う。しかし、この新見にも、やはり不安が感じられる。それは、題詞に示される如く、当面歌が詠まれたのは酒宴であると同時に、餞別という場でもあるから、果たして群臣嘉賓の宴を旨とする「小雅」の「鹿鳴」を、そのまま典拠として当てはめてよいのか、という点である。

ここでは、問題の五七〇番歌に再度執して、「小雅」の「鹿鳴」と

の異同を整理すると、共通点として、宴会という場を共有すること、宴会の場で「鹿鳴」が詠み込まれることが挙げられる。しかしながら、ここでは、一口に、共通点は宴会の場の共有にあると言っても、詩は君臣の宴、歌は属僚との宴である点と、詩は讃美の「歓宴」、歌は惜別の「別宴」である点で決定的な相違を見せている。これは見逃しえない二点であろう。

ということになると、この微妙且つ大事な二点を視野に入れていないらしい宗政説は出典として不都合となる。いや、厳密には「小雅」の「鹿鳴」は当面の五七〇番歌の直接の出典ではないと言うべきかもしれない。

漢土の「鹿鳴」の詩は縦関係と横関係を表わす二通りの用法がある。横関係を示す場合の「鹿鳴」の歌は主に惜別の宴席で詠まれたのが習いであった。このことはすでに前出の『文選』の蘇武の詩と『懐風藻』の詩に証明されている。この意味において、五七〇番歌の詠出の場と主旨が蘇武のそれにみごとに吻合するところから、ここでは一案として五七〇番歌の「鹿鳴」は蘇武の詩に暗示を得たものと見るべきではないか。そして、表現としての「鹿鳴」は、この場合、送る側が送られる側を嘉賓に見なして送別の宴を張るという意味に解釈する。かくて、鹿の鳴く時期の問題はもちろんのこと、なぜ、君臣の宴ならぬ上司（大伴旅人）と属僚（麻田陽春ら）との「別宴」において、「鹿鳴」の歌が詠めるのか、という宗政説への疑問がおのずから解けることになるのではないかと思う。

蘇武の「別詩」が当該の歌に影を落としていると見た場合、一つ考えておかなければならない問題がある。麻田陽春の漢籍の素養がそれである。この問題に答えるには、麻田陽春その人とその作品から答案を求めるほか道はない。

麻田陽春は渡来人で、もとは答本陽春といい、天智天皇の皇子大友皇子の師（『懐風藻』・「淡海朝大友皇子二首」）、兵法熟練の答本春初（『日本書紀』・天智天皇・四年八月、十年正月）の一族である。麻田連氏の出自は『新撰姓氏録』・「右京諸蕃下」には、「麻田連　出自百濟國朝鮮王淮也」（佐伯有清著『新撰姓氏録の研究本文篇』・三〇一頁・吉川弘文館・昭和三十七年七月）とある。

神亀元年（七二四）五月辛未の条に正八位上答本陽春に麻田連の姓を賜うとある（『続日本紀』）。天平二年（七三〇）前後に大典（巻四・五七〇左注、巻五・八八四題詞）。天平三年（七三一）従六位上大宰大典（『大日本古文書　東大寺文書之五』・「大宰府牒」三三六頁・昭和三十年三月）。天平十一年（七三九）正月外従五位下（『続日本紀』）。『懐風藻』に「外従五位下石見守麻田連陽春……年五十六」とある。

麻田陽春のこのような出自と出仕の履歴から、容易に漢風濃烈の筑紫歌壇のことが想起される。してみれば、「鹿鳴」の歌は対外交流の最先端に位する筑紫では、かの「梅花宴」のように、当代の歌壇において文芸の享受のテーマの一つだったことは想像にかたくない。当該歌は大伴旅人に贈るものであるし、また、麻田陽春の「大伴君熊凝が歌二首」（巻五・八八四、八八五）に敬和する山上憶良の歌六首（巻五・八八六～八九一）もあるところから、麻田陽春は大伴旅人と山上憶良らとの詩文的交流も頻繁だったと思われる。

麻田陽春は当該歌を含め、万葉集に歌四首、『懐風藻』に詩一首を

残しているが、ここでは、表現上、問題の「鹿鳴」の歌がその前に並べる五六九番歌と如何なる繋がりを持っているかについて検討してみよう。

◇　韓人の　衣染むといふ　紫の　心に染みて　思ほゆるかも
（巻四・五六九）

この歌では、上三句は「心に染みて」を起す序。「紫」の詠み込みに作者独特の工夫があると思う。「紫」は集中十四例あるけれども、それは大体において、意味的には、植物の紫草（巻三・三九五、巻十・一八二五、巻十二・二九七六、二九九三、十六・三七九一）のように使われる。そして、それは表現上、一方的に序詞（十二・二九七六、二九九三、三一〇一）や枕詞（巻一・二〇、巻七・一三九二、一三九六、巻十一・二七八〇、十六・三八七〇）としての用法に偏る。対して、麻田陽春のこの歌の「紫」のみは、「三位以上。浅紫衣」（『思想大系』本・『律令』・「衣服令第十九・四」）とあるように、正三位大伴旅人の礼服の色を示すと同時に、讃美の対象としての大伴旅人本人を暗示するものと思われる。これは序詞や枕詞と異なる「転喩」といった修辞法である。表現上のこの流れを承けて、問題の「鹿鳴」の歌では蘇武の「鹿鳴」を典故として引くという手段を取り、「転喩」の手法と呼応される形となる。表現のこうした流れの中で二首を繋ぎ合わせる役目を果たすのは、やはりこの「紫」だと思う。こう見られるのは、万葉集の「鹿鳴」の歌では、

◇　紫草を　草と別く別く　伏す鹿の　野はことにして　心は同じ
（巻十二・三〇九九）

のように、紫の草は紫色をしている用例多数の萩と同じように扱い、鹿の花嫁として詠まれるのが習いだったからである。

よって、連作のこの二首において、各々「暗喩」と「典拠」の修辞法で大伴旅人への思慕と惜別の情を婉曲に表現するところに作者の意図が見て取れるのではあるまいか。かくして、麻田陽春が餞別の宴席で「鹿鳴」の歌を披露した際、歌壇の宰領者である大伴旅人は会心の一笑を報いたに違いない。

（ま　しゅん・北大大学院博士課程）